



RISING

mini

Vol.07

一次創作、二次創作をひとまとめにした増刊誌 第七号登場!!

Creat.inc



目次

- 【新連載】ぼくらはポケキ一戦士 第一部完結編……04
ネクストワールド 名のなき世界3……13
黒板厨ゆうなマギカ…結……17
pokemon XY 第十二話……24
終焉と黎明の物語 紅き終焉……29
インフィニティ短編『シンプルイズベスト』……38
『Odd』シリーズ五周年プロジェクト「from 2015」……48
Odd news……45
【新連載】奴隸少女の勇者道……47
パラドックスよ、こんにちは。 第二話……75
次号予告……80

お知らせ…「俺の同級生は魔王」は休載です。

ぼくらはポッキー戦士 第一部完結編

1

年が変わり、二〇一四年。

僕はある場所へと向かっていた。格好はいつもと一緒だけれど、どことなく綺麗な格好にしている。どういう感じかといえれば埃を落としたりとか糸くずを取ったりとか、そんな感じ。

それじゃあ、僕はどこへ向かっているんだ、って？

そんなことは簡単なことだし、今までこれを読んでいた稀有な読者ならば解っているんじゃないかな。

そう。

「ここか……」

漸く到着して、名前を見る。

住宅街の中にひっそりと佇む一軒の家。住宅街だから普遍的な建物であることには間違いない。そして、この家には『彼女』がひとりで住んでいる。

ここはぐり子ちゃんの家だ。

ぐり子ちゃんの家は学校の裏山の中腹にある小さな新興住宅地の中にあつた。

だから学校からとても近い。それは周りから羨まがられるくらいだ。

「そんなことを言いにはわざわざ家の前まで来たのか、江崎」

そんな言葉が聞こえて、僕は上を向いた。

そこに居たのは、ぐり子ちゃんだった。ベランダに寄りかかり、僕の姿を見て笑っていた。ぐり子ちゃんは今晴れ着姿だ。なぜか、って？ 理由は簡単。今日はこれから初詣に行くから。

ポッキー戦士の相方である、彼女と一緒に初詣に行く予定があったのだった。

「さあ、江崎。行くぞ」

「うん、そうだね」

そう言つて、僕は踵を返した。

——その時だった。

僕の右腕が、無残にも切り取られた。

あまりにも唐突過ぎて、何が起きたのか解らなかった。

「……………え？」

僕は腕の方を見る。

腕は無くなっていった。

はつきりとなくなっていた。

血も出ていない、痛くもない。

聞いたことがある。あまりにも鋭い剣で切ったその切り口は、痛みも感じないっていうことを。

ぐり子ちゃんはその間ずっと僕を見ていた。きつと何があつたのか解らなかつたんだ。僕だって、解らなかつたんだから。

「ぐり子ちゃん」

声が、出なかつた。

いったい、誰がこれを――。

僕は、前を向いた。

そこに居たのは『影』だった。大の大人程の大きさの影。それが、笑っているような感じがした。

「……ぐり子ちゃんっ!!」

叫んだ。でも、声が出ない。

そして影は容赦なく僕の体を貫いた。嗚咽が走り、血を吐く。ぐり子ちゃんは驚いていたようだった。だが、動けなかつた。動かなかつたのかも知れない。

動いたら死ぬ——そんな本能が働いたのかもしれない。
だけども。

ぐり子ちゃんだけには逃げて欲しい。

たとえ、僕は死んでも構わない。

だけれども、ぐり子ちゃんだけは——。

「死ね」

小さい声が頭の中に響いた。

そして、

影が伸びた。

僕の叫びも届かずに、

僕の叫びも聞かずに、

それは、

ぐり子ちゃんの腹を貫いた。



「ぐり子ちゃん!!」

僕は目を覚ます。そこに広がるのは、僕の家天井だ。

見知らぬ天井などではない、ただの天井。

それを見て、僕は漸く夢だと理解した。

「夢……かあ。それにしてもリアルな夢もあったもんだ」

そう言つて僕は時計を見る。

今日は二〇一四年一月十一日。

初夢というには随分と遅い、最悪な夢だった。

2

あのあと。

僕はぐり子ちゃんに呼び出され、支部へと向かうことになった。

東日本在庫監視委員会西多摩支部。そんな長つたらしい名前だが、それが僕たちポツキー戦士の働く『職場』であった。ポツキー戦士は在庫の怪物『アンソウルド・モンスター』に対抗できる唯一の手段——戦闘を行うことができる。

通常、人間の脳は僅かしか使われていない。それを、ポツキーをスイッチのオンオフとして使用することで脳を格段に使用するようにした。そういうふうには僕達は調整されているのだという。ほんとうなのかどうか、真実は定かではないけれど。

「今日は来てもらつてほんとうに助かっているよ、ぐり子くん。それに江崎くんも」

「休日潰してまで話したいことがあるんだろうな？　もしもそれほど重要じゃないものだったら……」

「何を言っている。きちんと重要だ。それも世界にかかわる、な」

そう勿体ぶって、支部長はあるものを見せた。

それは手紙だった。

「……手紙？」

「ミカド教団というのを知っているか？」

「ミカド教団。ああ、聞いたことあるよ。アンソウルド・モンスターは人間の怠慢が生み出したモノであり、それを破壊することは神に逆らうことになる……そんなクダラナイ考えを掲げているカルト集団だろ。私の家にもそんな手紙はいっぱいやってくる」

「やはりそうだったか……。すまない、徹底はしていたのだが……」

「支部長、あなたのせいじゃない。私は私の意志でここにいるんだ。それ以上でもそれ以下でもないしそれを变えるつもりもない。それを变えるということは自分の意志を強引に捻じ曲げる、ってことだからな」

それを聞いて支部長は頭を掻いた。

「……ほんとうに君は素晴らしい人間だよ。私がどんなミスをしても君だけなら何とかなりそうなくらいには」

「奢るなよ。流石に私にも出来ないことだってある。かといってここで言うつもりもな

いが」

「そうだな。それでこそ普通の人間だ」

「私たちはポツキー戦士だがね……。その時点でまったく、普通の人間と一緒とは言えないだろうよ」

「そりゃあそうだ」

そう、ぐり子ちゃんと僕たちが話をしていた。

ちようど、その時だった。

基地が暗転した。

停電だった。

「どうした!! 停電か!?!」

支部長は慌てて部屋にいる人間に問いかける。しかし返事はない。

「ちくしょう……!! どうしたというんだ!! この設備は最高のセキュリティを誇るはずなのに!」

そして、今度は明転する。

そこに立っていたのは、少女だった。赤茶色の髪に、赤茶色の目。白いマフラーに茶色のセーター、ジーパンに両手を突っ込んでいた。

「お前……何者だ?」

「ミカド教団の人間……そうとだけ言っておきましょうか」

そして、少女は驚異的なスピードでぐり子ちゃんと間合いを詰めてきた。当然、僕と何か言葉を交わす時間も隙もない。このまま僕はぐり子ちゃんに頼むほかないのだ。信じるしかないのだ。

ぐり子ちゃんは即座にポツキーを噛み締める。しかし、それでも相手が有利だった。相手もポツキー戦士だというのだろうか？

しかし、相手は間合いを詰めただけでそれ以上は何もせず、定位置に戻った。だからぐり子ちゃんも僕も疑問に思って、それ以上攻撃しなかった。

「……どうした？」

「あなたの素質が本物かどうかを、確かめるため。それだけのことです」

「確かめたかった？」

「ええ。あなたは『カミサマ』の素質があるのですから」

「……カミサマ、だと？」

それを聞いてぐり子ちゃんは噴き出した。

「何を言っているんだ、お前？ 突然攻撃したのをやめたと思ったら、カミサマになる素質があるから？ それで私が納得するだけでも？」

「するしないではありません。あなたにはカミサマの素質がある。そしてその素質が本物かどうか確かめるべく、私は今日姿を現した。……時に、あなた、『ネオ・ポツキー戦士』というのを知っていますか？」

それを聞いて支部長の眉が僅かに動く。

僕とぐり子ちゃんはそれを知らなかった。

少女は溜息を吐いて、話を続ける。

「簡単な話が、ポツキ―戦士の強化版です。さらに強くした……と言ってもいいでしょう。そういうものが今研究されて、漸く実用化まで来たのですよ。強い力を身に付け、人類を支配する。ああ……なんて気持ちのいい話なのでしょうか」

時計を見る。

「おっ。そろそろいい頃合なので帰りましょう。それでは、また」

そして。

再び暗転する。

明転するまで数秒とかならなかったが、その時にはもう少女の姿はなかった。

まるで狐に抓まれたみたいだな――そんな感じだった。

ネクストワールド 名のなき世界3

第二章 第二話

イクスとイグレックはそれぞれ同じ牢屋に突っ込まれた。否応なしに入れられたということだ。

その牢屋は石レンガで壁が出来ており、それで覆われている。唯一そうっていない場所は鉄格子になっており、扉がひとつだけだ。

しかも監視が居る。監視が居るから、もし脱出するとするならば、その目を掻い潜らなければならなかった。

「……どうする？」

イクスはイグレックに訊ねた。

「どうしましょうね……。魔法さえ使えればどうにかここを脱出することは可能でしょう。しかしあの手つきからして、魔法を使える人間を押しえつけてきた実績めいたものがあるのかもしれない。もしそうだとしたら大変です」

「どうして？」

「魔法を発動するには時間がかかるのですよ。小さいものでも一分、強い魔法だと五分程度はかかります。そのあいだに抵抗することはできません。即ち、その意味すると

ころは……」

何をされても、抵抗することが出来ない。

たとえ、殺されようとしていたとしても。

「じゃ、じゃあ……どうすれば！」

「慌てることはありません。ならば、別の代替案を考えればいいのですよ。魔法以外で
どうにかする方法を」

「じゃあ、どうすれば……。それも考えついていうのか？」

イグレットは首を横に振る。

……残念ながら、手詰まりだった。

「……もしかして、そこにいるのはイクスじゃないですか？」
声が聞こえた。

それは、彼らにとって、一筋の光明となり得るものであった。

「まさかその声は……トロバか？」

「はい。村が破壊されて……、海に流されて。気がつけばここに居ました」

トロバは、イクスと同じアサメ村の出身であった。『安定化装置』へと連れ去られたテ
ィエルノとイクス、それにトロバとサナはとても仲良しだった。

「……サナはここに？」

イクスの質問にトロバは首を振る。

「いいえ。サナはイクスたちが来る少し前に売られてしまいました。どこに行ったかはもう……」

「……そうか」

「ところで、そこに居るのはどなたですか？」

「わたし？ 私はイグレック。イグレック・バトラーというの。ちよつとイクス……彼に用があつて、今は旅をしているところよ。ここから船に乗って海に出ようと思つてゐるのだけれどね。そのところに捕まってしまつて」

「海……外海へと出るんですか」

「まあ……そういうことになるわね」

イグレックの言葉はなぜか澱んだ。

「外海に出れば、もしかしたらサナを探すことが出来るかもしれない。見つけることが出来れば……見つけることさえ出来ればあとはどうだっていい。元々人間をかう権利なんてどの人間も持つてないんだ。奪つちまえばいい」

「でも……外海に出たかどうかも解らないよ？」

「いや、アサメ村とパレイアしかないこの島だからね。どこか外海に出て大陸からやってきたに違いないよ。まあ、どうしてこんな辺鄙なところまで来たのかは知らないけれど」

イクスはそう言つて、横目に男を見た。男は雑誌を見ながら時折こちらを見ていた。

「……取り敢えず問題はあいつか」
ここを監視する男。

「そうですね。魔法を使うにも隠れていないし、それが厄介……」

「なあ、イグレック」

イクスは声をかけた。

「なんでしよう？」

イグレックは首を傾げる。

イクスは笑みを浮かべる。

「きみの魔法は絶対にここから脱出することが出来るんだな？」

こくり。イグレックは頷く。

イクスはそれを聞いて大きく頷くと、トロバの肩をこちらに寄せる。

そして、彼は言った。

「それじゃはじめるぞ、作戦会議だ。ここから脱出するために、そして、イグレックの魔法発動が相手に気付かれないための、大切な役割決めのお時間だ」

黒板厨ゆうなマジカ…結

10

神は死んだ。

悪魔は死んだ。

黒板厨は死んだ。

空間は消えた。

世界は消えた。

そうして、だれもいなくなった。

その世界は真つ白な世界なのか？

いや。

その世界は、白い世界だと思っているのであれば、そいつは少々甘く見すぎている。

では、どのような世界なのか？

それは。

なってみないと解らないだろうよ。

黒板厨が居た。

それは世界に蔓延る『黒板世界』を浄化するために居た存在。契約媒体であるインキユベーター——『矢代健吾』を通して契約することで黒板厨になることが出来る。

清白優菜という少女が居た。

彼女は黒板厨になれば凄まじい力を手にするとして、インキユベーター——ひいてはそのボスの存在である闇の垂霊に目をつけられていた。それを防ごうとしている謎の黒板厨・御行篝。彼女もまた、運命に囚われた存在であった。

「闇の垂霊、あなたはいつまで彼女を追うつもりなの？」

「それは勿論——彼女を黒板世界にするまでさ。それをしてしまえば莫大なエネルギーが入る。それさえ出来ればこの地球には用はないよ」

対して、新たな黒板厨も姿を現した。

槍を持った赤い髪の少女、大倉杏。

剣を持った青い髪の少女、そして優菜の幼馴染、蓮野陽香。

二人の物語への登場は、さして篝には影響がない。

彼女は这个世界を幾度となく繰り返して、即ち二人の存在も、情報も知り得ていたからだ。

彼女は恐ろしいくらいのパターンを考え、恐ろしいくらいのパターンをひたすらに試した。

凡ては、彼女を救うために。

凡ては、自分のために。

そうして彼女は、最悪の黒板世界である——ワルプルギスの夜を倒した。

それからは幸せな世界だった。

彼女が黒板厨にならなかつた世界とは、平和そのものだった。

だが、それを許さなかつた。

世界は元々そうやって動いていく予定だったのだ。それが、急に変えられてしまえば、予定調和のために世界は動いていく。

それが道理だ。

そうして世界は動いていき、新たなる調和を見せる。

ユグドラシルという新たなる黒板世界の存在。

新たなる黒板厨と、新たなる世界。

ユグドラシルを使った『闇の乖霊』の思惑に乗せられてしまい、清白優菜は黒板厨と

化した。

そうして、そうして、そうして。

結局守れなかった。

そうして、そうして、そうして。

『Rafel』に入つた千屋芹那は凡てを理解しようとしていた。

凡てを手に入れようとしていた。

圧倒的な力から抗おうとしていた。

だが。

その結果は、

無だけが広がる世界。

世界は、破壊され――

12

目を覚ますと、そこは闇が広がっていた。

「こうして君は再び彼女を守ろうとして、出来なかつたわけだ」

箒が目を覚まし体を上げると、そこには闇の乖霊がいた。

闇の乖霊はその場に立っていた。闇が広がる世界で、あまりにもつまらなそうな表情

を浮かべていた。

「あなたは……」

「闇の乖霊、だ」

篝の質問に答えても、つまらなそうな表情は変わらなかった。

「……君は時間を操る能力を持った黒板厨だ。だからこそ、このように無の世界に居ても消えることがなく、存在していられるのだろう。まったく、そこまでアブノーマルならば倒すこともままならないじゃあないか」

「無の世界……？ ここにはもう、何もないというの……？」

篝の言葉を聞いて、からからと乾いた笑い声を上げる。

「そうだ、その通りだよ御行篝。君が様々な手段を用いて、清白優菜を救おうとしても、こういう悪い結果になってしまう。バッドエンド。おしまいというわけだ。君も、この世界も」

その言葉を聞いて、改めて篝は辺りを見渡した。

そこに広がっていたのは何も無い、無。闇が広がっていた。

「……優菜！」

篝は声を精一杯張り上げる。

「大倉杏！ 蓮野陽香！ 寺島鈴菜！ ……矢代健吾！」

知っている人間の名前を、言っていく。

しかし反応はなかった。

「あんた……何したのよ……」

「だから言っただろ。この世界は『無』だ。君が考えている以上に力を発揮しすぎたんだよ。そして、世界はそれに耐え切れなかった。破綻するのも無理はない」

「いや……まだ決まってるない」

まだ死んでない。

まだ誰も消えていない。

箒は最後まで願った。

だが、それは叶わなかった。

「君はほんとにあきらめが悪いね。いや、そこまで来ると褒めてやりたい気分だよ、御行箒。だがね、君はもうオシマイだ」

「いつ……私が終わったというの？」

箒は振り向いて、闇の垂霊に訊ねる。

「あなたは……いったい何をしたいの？」

「別に。黒板厨のエネルギーを使って、僕たちが住む世界と君たちが住む世界のエネルギー問題を解決してあげよう……そーいう優しい思いで居るんだけどねえ」

「だとしても、あなたは優菜を傷つけた」

箒は拳銃を構える。

それを見てもなお、闇の乖霊の余裕は消えることなどない。

「それで僕を殺すかい？」

闇の乖霊はゆっくりと箒の方に近づいていく。箒は狼狽えることなく、言う。

「近づくな。近づくな近づくな近づくな……！」

「いいじゃないか、別に。どうせずっと二人きりなんだぜ？ いずれこうせざるを得な

い。お互いがお互いを護歩せざるを得ないんだよ」

「嘘を言つて……。どうせこれはまやかしょ！ デタラメに過ぎないわ！」

「……ほんとに？」

闇の乖霊はそこで立ち止まり、首を傾げる。

「それなら見せてやるよ。最強で最悪で悲しい物語を。それは君にとって耐え難いものかもしれないが……そんなことは君が知ることもない。残虐で壊滅的で、精神に影響をきたすかもしれないが、まあ、そんなことはどうでもいい。先ずは君がどうしてそこま

で強固な精神を保っていられるのが、僕にとつては疑問で仕方なくてね。さっさと君の精神を破壊しておきたいんだよ。そう——こんな感じに」

そして。

闇の乖霊が指を弾いた、それと同時に彼女の視界は黒で塗り潰された。

Pokémon XY

第十二話

「コーストカロス凶鑑……」

イクスたちは新しく見る凶鑑に目を輝かせていた。当然かもしれない。今までずっと持っていた凶鑑とは違う、見たことのないポケモンがたくさん登場することを意味する凶鑑になったということだ。

その凶鑑を見て、イクスが一言。

「まだまだこの地方には、見たことのないポケモンがいっぱいいるってことだよ……」
その言葉にほかの人間も賛同するように頷く。

ジーナとデクシオとは既に分かれ、コウジンタウンへ向かうため再び彼らは歩いてい
た。

そして。

「あ、あれは……」

目の前に見えるのは、大きな白い建物。

「コウジンタウンに到着したんだー！」

それがコウジンタウンの博物館であることだと、彼らが知ったのはそれから少し後の
ことだった。



コウジンタウンポケモンセンター。

「はあー、やっと着いたね」

「……そうだね」

イグレッツクの言葉にイクスは答える。しかしイクスの言葉はどこか重たい。疲れているのが原因だろう。

「とりあえずここから化石があるという洞窟へ向かうには……どうしたらいいんだろう」
サナが言った。それは彼らにとって共通の疑問であった。

これから化石の洞窟へはどう向かえばいいのか。

彼らにとって、一番の議題になっているのは『メガシンカ』についてだ。メガシンカは石が必要だと言われており、そのため、化石の採れる洞窟ならば何かあるのではないか——そう期待していたのだ。

「まあ……とりあえず、あればいいですけどね。無かったら完全に骨折り損の草臥れ儲けてやつですよ」

「骨折り損の……なんだって？」

「草臥れ儲け、です」

「トロバは相変わらず難しい言葉を使うのが大好きなのよねえ。ほんと」
サナは皮肉混じりに呟く。

イクスはその状況をどうにかしようと小さく咳払いした。

「……とにかく、まずは洞窟へ向かおう。話はそれからだ」



9 番道路、トゲトゲ山道。

そこは普通の人間が歩くことを許されない、デコボコした道である。

「どうやって通ればいいのかしら……」

「あ、見て！ あそこにサイホーンがいるわ！」

サナの言葉のあとに、イグレットは言った。

そこに居たのはサイホーンの群れだった。

そしてその群れを先導するトレジャーハンターの姿があった。

「あの……すいません！ そのサイホーンに乗せていただけませんかー！」

イグレットは叫びながらトレジャーハンターへ近づく。

「構わないよ、そもそもこの山道はサイホーンに乗っていくことが出来るスポットとして有名になっているからね。若干観光地めいたものにもなっているし」

「へえ……はじめて知りました」

イグレックの言葉にトレジャーハンターは首を傾げる。

「そうかい。ここはそれなりに有名なだけだね。子供たちだけで旅をしているのを見るのも、僕にとつては充分珍しいことではあるけれど」

「ポケモン図鑑を埋める旅をしているんです」

そう言ってイグレックはポケモン図鑑をトレジャーハンターに見せた。

それを見てトレジャーハンターは目を丸くする。

「ほう！ ポケモン図鑑を埋める旅をしているのか。このカロス地方は広大だからね。時にはポケモンの力を借りなくてはならない時だって出てくるだろう。そうして僕たちは育ってきたと言ってもいい。その気持ちを忘れてはならない、と僕も常日頃考えているからね」

そう言いながらトレジャーハンターはイクスたちをサイホーンに乗せてくれた。

「サイホーンの操縦の仕方？」

「だいたいですが、知っています。母がサイホーンレーサーなので」

答えたのはイグレックだ。それを聞いてトレジャーハンターは頷く。

「ならば、大丈夫そうだね。それでは、良い旅を！」

そう言ってトレジャーハンターは手を振った。

イクスたちもそれに答えて、手を振りその場を離れた。

「さて！ サイホーンに乗ることも出来たことだし、急いで洞窟へ向かいましょう！」
「オーッ！」

イクスたちは大きく腕を突き出した。

目指す場所、輝きの洞窟まではあと少しである。

トレジャーハンターはイクスたちが見えなくなるまで手を振った。見えなくなったあと、またサイホーンを乗りたいと思う人を待つために定位置へついた。

そこでふと、彼らは思い出した。

「すいません、サイホーンに乗りたいのですが」

声が聞こえた。

「解った。それじゃ好きなサイホーンに乗ってくれ」

異質な男だった。スーツもネクタイもサングラスも凡て赤で決めたファッションの男だった。髪も何だかよく解らない髪型をしており、至極目立つ男だった。

それでも、彼はそれを不審と思うことなく、男にサイホーンを渡した。

そして、男はサイホーンに乗り込み、イクスたちの後を追うように輝きの洞窟へと向かった。

終焉と黎明の物語

(赤き終焉 第二話)

トウカシテイ。

長閑な街である。ジムがあるが、そのジムはバッジを多く集めないと挑むことすら不可能だ。

そしてオメガはその街へとやってきた。

目的はただ一つ。父であるセンリに、ポケモン図鑑をもらったこととポケモンをもらったことについて説明するためだ。

ポケモンをもらったことについて、母親はそれを認めてくれた。しかし彼の父親はとつても厳格であり許してくれるかどうか微妙なところだった。

「できることならば会いたくはないんだが……」

オメガは独りごちる。そうは言っても無駄だ。母親が釘を刺したからである。

——もし父さんに会わないのであれば、今すぐポケモンと図鑑を返してきなさい。

それは彼にとって苦痛だった。出来ることならしたくないことだったが、しかしそれ

をしないと凶鑑とポケモンを返さねばならない。それが彼にとって嫌なことだったのだ。トウカジムの扉を叩く時も、彼は決心することができなかった。まだ躊躇っていたのだ。はつきり言ってそれはもう諦めるべきものではあるが、しかし彼にとって彼の父親とはあまり会いたくないものだった。

彼は漸く決心して、扉を叩く。

しかし反応はない。

「おかしいな、ジムは留守にしているなんて聞いていないんだけど……」
疑問に思つて、オメガは扉を開けた。

「どうしてポケモン捕獲の指導をしてくれないんですか！」
声が聞こえた。

中に入るとセンリと緑色の髪をした少年が会話をしていた。いや、今の場面を見る限り少年が一方的に話をしているようにも見える。

センリは漸く口を開いた。

「ミツルくん、君の気持ちは解る。だが、君は病気らしくてポケモンを捕まえることは愚かポケモンに触れることすら怪しいらしいではないか？ 君の両親……特に母親の方からそう言われてね、私としてもそれを断るわけにはいかないのだよ」

センリの言葉は正論とも言えるものだった。

しかしそれは聞いているオメガにとって、聞き捨てならないことに思えた。

「父さん」

だから、彼は声を出した。

自らがここにいることの、意思を示すために。

「おや、オメガ。母さんと来たのか？」

オメガは首を横に振り、

「いや、ポケモンと来たよ。博士からポケモンを貰ったんだ」

それを聞いてセンリは頷く。

「そうか……。お前もそういう年齢になったわけだ。父さんも嬉しいぞ」

「それより、ポケモン捕獲の指導をしない……。ってどういこと？」

オメガの言葉を聞いて、センリは目を細める。

小さく溜息を吐いて、答えた。

「……聞いていたのか」

「ああ。最初からではないけれど、ポケモン捕獲の指導をする約束だったんじゃないのか？ どうしてそれをしないんだ？」

「……そこから聞いていたならば、お前にも理解出来ないわけではないだろう。オメガ、

この少年……ミツルくんはとても病弱な身体をしていてね……。あしたには空気の綺麗な街へと移るらしい。だから、その思い出のためにポケモンを捕獲したい。そしてその指導のために私が呼ばれたわけだ」

「いいじゃないか。補佐として父さんがついていくんだろ？」

「責任という問題があるのだよ、オメガ。私が補佐としてついていったとき、ミツルくんが倒れてしまったらどうする？ それこそ私の責任になるだろう」

「責任のために、ミツルくんのポケモン捕獲を諦める……そう言いたいのかよ」

「仕方ないだろう」セリリは溜息を吐く。「私だってしたくないことだよ。ポケモントレーナーが一人でも増えることはジムリーダーとしては嬉しいことだ。だが、だがね、ポケモンを育てることを約束できない人間を増やしてはいけない。野良ポケモンを捕まえたのなら、愛情を持って優しく接することの出来るトレーナーに育ててほしい。私としては……いいや、それは誰もが思うことだろうな」

「……」

ミツルは黙ってしまった。

それを見てセリリは呟く。

「……だが、そこまで私も鬼ではない。子供同士で『子供が持っているポケモンでミツルくんがポケモンを捕まえたなら』話が別だ。いいか、オメガ。私はこれから一眠りする。机の上にあるモンスターボールは二種類ある。空のモンスターボール五個とジグザグマが入ったモンスターボールだ。決して持ち出すんじゃないぞ、絶対だ。そしてミツルくん、君も最後の思い出作りにオメガと遊んでくるがいい。まあ、夕方くらいまでなら何の問題もないだろうし」

それを言って、センリは足早に立ち去っていった。

「なんというか……君のお父さんってお茶目な人なんだね。もっと厳格な人だと思って
いたよ」

「いや、僕の時もそうだったと思うけれど？　少なくともあまりこういうのを好む人では
なかったと思う」

「そうなのかい？」

ミツルは首を傾げ、訊ねる。

確かに彼にとつての『センリ』とはそれであるが、子供から見ると『父親』の姿は違う。
関係者と無関係者では立ち位置が違うというのはよくあるケースだ。

「……まあ、そんなことはどうでもいいよ。とりあえず、どんなポケモンが欲しいの？
それを聞かせてくれないか」

「ラルトスが欲しいんです」

「ラルトスって……珍しいポケモンじゃないか。このあたりで手に入るのかな……」
「入ります……きつと！」

なぜか彼は前向きになっていた。

だが、ポケモン捕獲とはそう甘くないのは彼も知っていた。

とはいえ、初心者にそう言うのも無駄というものである。

可哀想になってしまふ。実際はそれも甘えであるのだが、しかし彼にそれを言うのも野暮だった。

そんなタイミングのことだった。

目の前にポケモンが姿を現した。普通ならばポチエナかジグザグマだろう——オメガはそう思っていた。

しかし、実際に出てきたポケモンはそうではなかった。

「えっ……」

そのポケモンは、ミツルが捕まえたかったポケモン。

ラルトスが首を傾げる仕草で、そこに立っていた。

「や、やった……。ラルトスだ……」

ミツルはジグザグマの入ったモンスターボール、それに空のモンスターボール三つを持ってラルトスを見つめる。ラルトスもミツルの様子を伺っているようだった。

「ミツルくん、今はジグザグマを出して。ポケモンは体力満タンじゃ捕まえるのは難しいんだ。だから、体力を削ることに専念して」

その言葉を聞いてミツルはジグザグマの入ったモンスターボールを投げた。

刹那、モンスターボールからジグザグマが出てきた。

「ジグザグマに命令出来る技はたくさんあるけれど……取り敢えず『たいあたり』でい

いかな。さあ、ミツルくん。ジグザグマにたいあたりを命令するんだ」

「うん。ジグザグマ、たいあたり！」

それを聞いてジグザグマは頷く。

そして、ジグザグマはラルトスに体当たりを食らわせた。

どうやらジグザグマが放った一撃は急所に当たったらしく、一撃でだいぶダメージが蓄積されているようだった。

「ダメージが蓄積されているみたいだね。だったら、モンスターボールを投げようか」

「う、うん……！」

ミツルはモンスターボールをラルトス目掛けて投げた。

そのボールはラルトスに命中して、ラルトスはボールの中に入っていった。

一回、未だ序の口だ。ここではまだ油断してはならない。

二回、半分経過した。だからといって油断は禁物。

三回、これでラスト。ただし、この時で失敗するケースもある。

そして最後、カチッと音がして――。

ラルトスがモンスターボールの中に入った。即ちそれは、ミツルの初めてのポケモンを捕獲したこと、ということの意味していた。

「……ありがとうございます、センリさん。おかげで手に入れることが出来ました」
次の日、センリにお礼に言ったミツルはラルトスの入ったモンスターボールを見せて、
頭を下げた。

「私は何もしていない。強いて言うならば、私の息子に礼をするといい」
「オメガくんにも助けてもらいました。ほんとうにありがとうございます」
オメガにも頭を下げるミツル。

「ミツルー！ もう行くわよー！」

「はい！」

ミツルは外からの声を聞いて、二人に頭を下げて去っていった。

ミツルが出て行ったのを見送って、センリは咳払いする。

「さて、改めてオメガ……初めてのポケモンを手に入れて、どうだ？ 順調か？」

「ああ。一応聞いておくけど、最初のポケモンジムってここじゃないんだよな」

「そうだ。次のポケモンジムはカナズミになる。さらにバッジを集めたとき……改めて戦おう」

そう言って、センリとオメガは別れた。

次の目的地は——最初のジムがあるカナズミシティである。

終焉と黎明の物語 今後の展開について

終焉と黎明の物語 1

二〇一四年十月七日、投稿予定。

プロローグと紅き終焉第二話・蒼き黎明第二話を収録。

続く第二巻は十一月二十一日投稿予定。以後、月一ペースでの投稿を予定しています。
お見逃しなく。

インフィニティ短編『とある世界のハロウィン』（再録）

「ハロウィン？」

崇人はマーズにその単語を言ったところ、怪訝な表情を示した。どうやら、この世界にはハロウィンという概念がまったくもってないらしかった。

「そうだ、ハロウィンだ。おめかししてな、仮装するんだよ。そして『トリックオアトリート!』って言うわけなんだよ」

本当はそれに宗教的意味が混ざっているのだが、この世界の宗教とは相容れないことも考えると、それは言わないことにしておいた。

崇人が言ったその言葉に、マーズは興味津々としているようだった。

「それで……、そのハロウィンとやらはいつなんだ？」

「十月三十一日だな」

「明後日か……。よし！ タカト、やろう！ そのハロウィンとやらを」

「えー、まじかよ」

マーズがまさかそんなことを言い出すとは思わなかった崇人は小さくため息をついた。「なんだ？ したいんじゃないのか、ハロウィン」

「したいんじゃないくて、ただただ懐かしくなっただけだよ」

呟いて、崇人は部屋を後にした。



二日後。

十月三十一日。

崇人はマーズからの連絡を受け、ある場所へと向かっていた。

「どうしてエステイの家で待ち合わせなんだ……？」

目的地は。パロング洋裁店。どうしてここが待ち合わせなのかは崇人には解らなかつた。ただこの日はエステイもアーデルハイトも何故だか縮こまって崇人の話をなおざりにしていたので、ケイスから「何だい、君はエステイに悪いことでもしたのかな？」だなんて言われたが、どうも崇人には身に覚えのないことだった。

「何か悪いことでもしたかなあ……」

崇人はつぶやいて、パロング洋裁店へと辿りついた。ここに来るのは、二回目になる。

店の前に立った崇人は、何か違和感を覚えた。

カーテンが閉まっていて、窓から様子が見られないのだった。

それがなんだか至極不思議な感覚で、不気味な感覚だった。

とりあえず。

「一先ず、家へ入ることとした——そう考えてドアノブを握って、ドアを開けた。

「ハッピーハロウィン!!」

そんな声を聞いて、クラッカーによる紙吹雪が彼の目の前に迫ってきたのは、ちょうどその時だった。

崇人ははじめ何が起きていたのが茫然としていたが、近付いてきた黒いローブに髑髏——死神といってもおかしくない風貌の誰かが崇人の肩を叩いた。

「タカト、私よわたし」

「え、エステイ……?」

その声はエステイだった。どうやらそれはコスプレのようだった。

崇人はなぜそうだか解らなかったが、少し考えてこれが漸く『マーズに言ったハロウィン』ということが理解できた。

崇人がマーズに言った、崇人が居た世界の記憶。

ハロウィン、とは——。

崇人の居た世界では、毎年十月三十一日に行われる古代ケルト人が起源と考えられるお祭りのことだ。もともとは収穫を祝い、悪霊を追い出す宗教的な意味合いのある行事である。

歴史的にはイギリスやアイルランドなどのアングロ・サクソン系諸国（など）と言って

もマーズたちには理解できないだろう。崇人と同じくこの世界にやってきたヴィーエックに話せばまた別だろう。で行われているが、現代ではアメリカや日本でもそういう意味合いは無くなつてはいるのだが、行われている。

日本——崇人の居た国では、宗教的背景の上でハロウインを行つているのではなく、その殆どがイベントとして楽しむもので娯楽・商業化されたものとなつている。

仮装や、『トリックオアトリート!』という言葉がハロウインでは印象的なものとなっている。特に後者のことについて崇人がマーズに言つたとき、マーズの目がとても輝いていた。

「……なるほどね、みんなで隠れてハロウインをやつていた、と」

そこで崇人はそれぞれの仮装を見てみることにした。

まずエステイは——恐らく『死神』だろう。黒いローブに髑髏のお面、大きな鎌を持つている。今はお面をずらし、エステイの顔だけが見えている形となっている。

次にアーデルハイト。恐らく『魔女』のコスプレをしているのだろう。黒い三角帽にスカート、黒いマントを羽織つた黒ずくめとなっている。目の下には丸がぼつぼつと描かれていて（メイクだろう）、本人は恥ずかしがっているようにも見えるが、崇人が見ればノリノリにしか見えない。

最後にマーズ。『黒猫』のコスプレをしているようだった。黒い猫耳に、赤い首輪、黄色のカラーコンタクトまでしている。崇人が一瞥すると、右足を上げて「にゃん」と言

ったので、思わず顔を背けてしまった。

「……で、どうするんだ？ 俺は今、お菓子を持っていないぞ……って」

そこで、崇人は嫌な汗をかいた。

なぜなら、それを言った瞬間、マーズたちの目が崇人をじっと見ていたからである。

崇人は確信した。

——これを狙ったんだ……!!

そして崇人は踵を返し、ドアノブを握るも——扉は既に閉まっていて、空く様子を見せない。

「う、嘘だろ……!!」

そして。

崇人がマーズたちによってどうなったのか——今はこれ以上語ることもない。



次の日、崇人とエステイとケイスがいつものように食堂で会話をしていた。

「なるほどなるほど……そんなことがあったのか。呼んでくれればよかったのに……そ

んな面白いことを」

「俺にとつては面白くなかったけれどな」

崇人が呟くと、またまたーとエステイは言った。

「楽しそうだったじゃん、タカトくん。ここにあるコスプレ写真のように、さ
そう言つてエステイの手にあるのは、写真だった。」

それも、崇人のコスプレ写真だった。彼が着ていたのはスクール水着だった。もともと女顔っぽかった崇人がそれを着るとなんだか女子に見えてしまう。

「わーお」

ケイスは笑つて冗談っぽく「眼福眼福」と言った。

「お前……そっち系だったのか？」

「どっちでもいける」

「嘘だろ」

「嘘だよ」

ケロツと笑つて、ケイスはエステイから写真を取った。

そしてその写真を興味津々に眺めた。

「へえ……これって誰が持っていたの？」

「私だよ」

「ふうん……」

ケイスはそんなこと気にもとめずに写真をエステイに返した。

「ありがとう。ほかにもあるの？」

「まだまだあるわよ！」

そう言っただけでエステイは封筒を取り出し、中身を出した。そこには十枚ほどの写真が入っており、どれも崇人のコスプレ写真だった。

「自分たちのコスプレ写真はいいのよ！」

「だってタカトくんのコスプレ目当てだったし」

「あれはネタではなくて、もともと俺がお菓子を持っていないことを知ってた上で……ということなのか？」

「お菓子を持っていないことはその日の学校で確認済みだったもん」

「だったもん……じゃねえよ！」

そんな返事を聞いて、エステイは悪戯っぽく微笑む。崇人は来年もハロウィンがあるならば、その時はお菓子をたらふく持っていかうと心に誓うのだった――。

了

oddシリーズ五周年プロジェクト 特設ページ 「odd news」

先ずはニュースです。

わたくし巫夏希は2015年に創作5周年を迎えます。さらに、2010年7月から連載しているoddも5周年！これはめでたい。

というわけで、「巫夏希5周年プロジェクト」第一弾として、oddシリーズの増刊を刊行します！

タイトルは「odd magazine」となります。内容は今のところ、このようなものを予定！

【目次】

- ・ oddシリーズ、第一作の設定資料
- ・ 各作品の第一話を掲載、さらに特別短編を4本収録！
- ・ 新作短編『予言の勇者と錬金魔法学者と奴隷少女と飛行機乗りの、たった一度の邂逅』掲載！ こちらはシリーズ一作目〜四作目の完全クロスオーバー作品となります。
- ・ 「New Testament[version 1.1]」掲載決定！ こちらは二作目「New Testament」を他サイト連載のために改稿したものととなります。十話一挙掲載！
- ・ シリーズを網羅する年表「odd CHRONICLE」収録！

・本編だけじゃない！ 「FORSE」完全新作と「ルームメイトが幽霊で、座敷童。」の新作短編を掲載します！

さらにoddシリーズは展開していきます！ なお、増刊の刊行は「2015年夏」を予定しています！ どうか、よろしくお願いします。

それと一緒に、「巫夏希5周年プロジェクト」をご紹介します！ 5大発表を行います！

- 1 oddシリーズ5周年増刊誌刊行！
- 2 RISING 2014年冬刊行予定！ 詳細は次号にて！
- 3 「odd」シリーズ電子書籍化計画進行中！
- 4 次号発表！
- 5 RISING第二号にて発表！

まだ発表しないのかよ、という話ですが……もう暫くお待ちください。発表が伸びるかもしれません。どうか、今しばらくおまちいただけると幸いです。

それではまた次号で！

奴隷少女の勇者道

0

その場所は夏でもないのに、噓せ返るほどの暑さだった。

大きな木の歯車を、たくさん人間が回している。それを指示しているのもまた、人間であつた。

「おらあ！ きりきり働け！ お前たちが働かないと、今日の飯は抜きにするからなあ！」

男の声は鋭い。そしてその声が、歯車を回している人々に突き刺さる。

彼らはここに居る最下層民——正式名称はそうであるが、実際には『奴隷』などと呼ばれている——の監視役としてここに居る。いつも噓せ返るようなこの場所に居るわけではなく、殆どが代行者による監視に任せている。

代行者——それは魔法によって実現される技術の一つだ。どこか遠い国ではゴーレムなどと呼ばれることもあるが、少なくともここでは『代行者』などと仰々しい名前と呼ばれている。

最下層

ここは文字通りの、どん底だった。

しかしながら、そんな最下層民にも唯一の休憩が与えられる時間がある。交代で行われる一時間の休憩だ。しかし、これは一日一回しか与えられず、この休憩でそう簡単に休まるわけでもない。

しかし、ここでは腐る程の人間が居る。代わりもいるし、それを捨てられるだけの余裕もある——ということだ。

ここでは、人間は人間として扱われることのない。

そんな、場所であった。

その少女——イヴァンに休憩時間が与えられたのは、ちょうど朝のことだった。とはいえ、彼女は生まれながらにしてこの最下層に居るので、彼女はいわゆる『常識』というものを知らない。

少女や女性の最下層民が行うことは、男のように体力仕事ではない。

次の層にいる人間の、慰み者になることであった。もちろん、拒否することなど出来ない。拒否した時点で男ども同様、文字通り捨てられてしまうのだから。

彼女、イヴァンもその慰み者のひとりだった。彼女には休みが殆ど与えられない。朝から晩までひっきりなしに、別の人間とともに寝るのだ。

そんな、疲れ果てた彼女の隣りにひとりの少年が座った。

帽子を被った少年だ。髪は黒く、しかし服はボロボロであった。

「……イヴァン」

少年は、彼女の名前を呼ぶ。少年は青い眼差しをイヴァンに向けた。

イヴァンは、小さく頷いた。

「今日……俺たちは行動を起こす。お前もそれに乗じて逃げる。扉の鍵は既に入手してコピーも手に入れていいる。問題はない」

「……出ることが、できるの？」

イヴァンは訊ねる。少年は頷く。

「ああ。きつとできる。絶対にできる。……君をこんな場所で、一生を終わらせてはいけないんだ」

少年の話は続く。

「どんな時だって、希望を忘れてはいけない。どんな時だって、絶望に囚われてはいけない。それさえ守れば、必ず道は開けるはずだから」

少年の言葉は、イヴァンには少し難しい話だったけれど、それでも彼女は頷いた。それを見て、少年は微笑む。

「それじゃ、またね」

そう言って少年は手を振った。



目の前に広がっているのは鬱蒼と生い茂った緑であった。

しかし彼女はその光景について喜ぶこともなく、ただ走るだけだった。

第四層、第七十八区画『草原エリア』を走る彼女を追いかけるのは数人の兵士だった。

逃げなくちゃ、逃げなくちゃ。

逃げなくてはいけない。逃げなくてはいけない。

捕まってしまった、その先に彼女が生きる希望などない。

走れ、走れ、走れ。

川を越えたその先に広がっているのは——海だった。瀑布だった。

あまりにも高い位置にあるのか、下が雲海になっている。

ここから飛び込めば——死ぬ。しかし、水が流れている。これに沿っていけば、或いは——。

「おい、あそこにいたぞ！」

見つかってしまった。

「——もう、選択の余地はない……」

彼女は呟いた。

そして。

彼女は、その瀑布へと飛び込んでいった。

第一章 シスター・レミリア

First Episode: First contact.

1

死んだら無だ。その後には何も残らない。自分という存在はきえてしまうだろう。何も残らず、何も託せず、まるで自分など元から居なかったのではないかのよう、いともあっさりこの世界からはじき出されてしまう。

そんなのは嫌だ。

忘れられたくない。

忘れられたくない。

忘れられたくない。

「この子は どうして こうなっ てしまっ たのかしら」

ねえ、ママ。いい子にするから忘れないで。

「本当だ。おかしくなってしまうたのかもしれないな」

ねえ。パパも、お願いだから。

私を忘れないで——。

そして、彼女は目を覚ました。ベッドから起き上がり、頭を撫でる。

最悪な夢だった。嫌な夢だ。最近はあまり見ないと思っていたが、また見てしまった。最悪で最低な夢。それは彼女にとつての失ったはずの、封じこめたはずの、過去。

レミリア・クロプスはシスターである。海岸沿いにある小さな教会を一人で支えている。かつては僧侶もいたが、死んでしまった。

この世界には魔なるもの——魔物が住んでいる。この世界はもともとひとつのおおきな世界だったものが、昔あった何らかの災害によって幾つかに分かれてしまった——というのはこの世界に住む人間ならば必ず知っていることだ。

レミリアは起き上がると、教会にある十字架の前へ向かった。そこへ向かうと跪き、祈りを捧げる。シスターである彼女の一日の仕事の一つである。

この教会は海に面していることから、よく船が沈まないようにとお願いする人がやってくる。しかし、残念ながらここは願えば叶う場所ではない。神様に願いを聞き入れて

もらえるかどうか——それが大事なのだ。

十字架への祈りを終え、彼女は海岸へと向かう。清掃も大事な仕事の一つだ。海を通して流れ着くゴミの数々を、どうにかこうにか捨てていくのが彼女の役目でもある。

「……おや？」

そんな中、彼女はあるものを見つけた。

最初は布切れのようにも思えたが、よく見ると違うようだった。

「違う、これは……人間!？」

彼女は漸くその正体に気がついた。

そして、その人間に近づき身体を大きく揺さぶる。

「だ、大丈夫ですか!!」

しかし、その人間の反応はない。

一先ず、何らかの策を講じなくてはならない。

そうして彼女はその体に手を当てて、目を瞑った。

刹那、彼女の手が、そこを中心として淡い緑の光を放ち始めた。

数瞬の間で、彼女の体についていた細かい傷が消えていった。

そして。

「……んっ」

彼女は目を覚ました。

「大丈夫ですか?!」

レミリアは彼女に訊ねた。

少女はまだ自分がどういう立ち位置にあるのかを理解しておらず、また、ひどく疲れ
ているようだった。

「……ともかく、身体を休めましょう。すぐそばに教会……があるから、そこで」

「あ、あなたは……?」

「そんなことより、今はあなたの体をなおすほうが先決よ」

そう言つて、レミリアは彼女の体を担いだ。

とても軽かった。

不安になる軽さだった。

彼女がいったいどういう人生を歩んできたのかが、垣間見えるほどだった。
だからこそ。

彼女にはいい人生が待っていることを教えなくてはならない。

彼女に生きる希望を与えなくてはならない。

それがシスター・レミリアの仕事なのだから。

少女が目を覚まして、それからレミリアは少女にスープを与えた。ここは教会でそれなりの寄付もあるが、しかしながらそれは彼女一人の生活に消えてしまうために、少々切り詰めることも覚悟せねばならない——レミリアはそう思つて溜息を吐くのであつた。レミリアはスープを少女に与えたあとは、色々と学ばせることにした。話を聞いた限りだと、ひどい仕打ちを受けてきた（あくまでもそれは彼女が口にするのではなく、察しただけであるが）ようだつた。

彼女を優しく受け入れなくてはならない。

門戸を開いて、人々を受け入れる。

それがこの教会なのだから。

「今日はこの世界の歴史を学びましょうか」

レミリアの前に少女は座る。小ぢんまりと座つて、ただ彼女の姿を眺めている光景はなんとも微笑ましい。

「この世界は昔々、カミサマが作り出した世界だと言われています」

そう前置きして、シスター・レミリアはこの世界の歴史について話し始めた——。
この世界。

アースと呼ばれるこの世界は、かつては大きな一つの球体だった。

しかし、世界で怠惰を働く人類に怒りを覚えた神ガラムドが世界を幾つかに分けて、簡単に行き来できないようにした。

そして、その一つの空間というのが——アース。その分かれた欠片の中で一番大きいパーツであった。

そのパーツに住んでいた人々は、神の怒りであることを知って、それを宥めようと大きな神殿を建築した。

それこそが、『天つ国・マホロバ』と呼ばれる場所であった。

この世界で一番天に近いとされる山の頂の、さらに上に浮く空中島。それが天つ国と呼ばれる場所であった。

そこには『神国教会』の本部があり、シスターである彼女たちはそこに定期的に報告を入れるのである。

まあ、それはこんな寂れた教会で一人のレミリアには関係のないことであるのだが。——と、そこまで説明したあたりで、ふと少女のほうを見ると、少女は眠っていた。

「……まあ、しょうがないわね」

そうつぶやいて、レミリアは布団を彼女にかけた。

ふと、彼女はそこで時計を見た。

時刻はもうお昼となっていた。

「あ、ごはん作らなくちゃ」

ごはんを作り、食べることも彼女にとっては『仕事』である。神に祈りを捧げて、今日のごはんを食べれることに感謝する。それも彼女の、シスターの『仕事』の一つでもあった。

彼女は立ち上がると、キッチンへと向かった。寂れてはいるものの、キッチンだけは整備している。理由は単純明解。虫が怖いからだ。

ラジオの電源を点けて、彼女は鍋に野菜を投入していく。

ラジオからはノイズ混じりに、声が聞こえてくる。

『——昨夜、一人の少女が瀑布から飛び降り、「下界」へとやってきました。ザザッ……これは、我々「神国教会」にとつて重大な嚴罰処分となるのは間違いないありません。ザザッ……ザザッ……ザザッ……ともかく、見つけ次第「マホロバ」に強制送還いたします。しかし残念なことに、逃げ出したのは……ザッ……というわけで、名前も把握出来ておりません。ですが、我々は全力をあげて、探し出します。幸福の国から逃げ出す人間なんて、下界からすればなんて愚かなことでしょうか？』

それを聞いて、彼女は思わずラジオの方に振り返った。

今、ラジオはこう言った。

『ひとりの少女が瀑布から飛び降りた』

それが真実だとすれば、そしてその少女が彼女だとすれば——。

レミリアの不安は強まっていく。彼女に何があったのかは十分に想像がつく。しかし、『天つ国』から流れ着いたものとみれば……話は変わる。

彼女、シスター・レミリアはシスターだ。だから、彼女は神国教会に従わなくてはならない。しかしながら、彼女は一度も神国教会の使者が来たこともないのを、憤りを感じていた。

「というか、瀑布から飛び降りるって、『天つ国』を相当嫌った……ってことよね」
下界の人間からは、天つ国は最高の場所であると言われている。

曰く、そこは天国のような場所である。

曰く、そこに住むともう下界には戻りたくないほど優雅な場所である。

まあ、ともかくそのような話題がたくさんある場所。そこが天つ国・マホロバなのだ。

そのような場所から逃げてきた少女——それだけで普通に考えればアブノーマルなのだ。

だが、現に彼女は逃げてきている。

それは即ち。

マホロバが下界の人間の知るような、素晴らしい場所ではないのでは？

そんな可能性をも考えてしまう。

「……かといって、彼女に直接聞くのもね」

それが一番だ。

だが、それでもし正しければ——彼女の精神に深く傷を負っている可能性がある。だって彼女はそこから逃げてきたのだから。何か深い傷を負っていてもおかしくはなかった。

だとすれば、それを守るのは彼女の仕事だ。

例え神国教会が正しくて、彼女が間違っていたとしても。

弱い人間は助けなくてはならない。それが彼女の信条だったからだ。

御粥を作って彼女はベッドへと戻った。少女は起き上がっていて、窓から外を眺めていたようだだったが、御粥から出てくる匂いを嗅いで、レミリアが何かを持ってきたことに気がついたらしい。

「ご飯を持ってきたよ。御粥だけれど……いいかな？」

それを見て少女のお腹がぐぎゅるる、と鳴った。

少女はそれを聞いて頬を赤らめた。

レミリアはそれを見て微笑んだ。

「熱いから、少し冷ましてから食べたほうがいいからね」

そう優しく声をかけるのはシスターの基本だ。どんなものにも優しく声をかける。それがシスターめいた行動だ。

少女は御粥に添えられたスプーンを手にとつて、粥を一口分掬つた。そしてそれをふうふうと息で冷まして、口に入れた。

だが、まだ熱かつたらしく、口の中ではふはふと冷ましていた。

「熱かつたかな……ごめんね。今、お水持つてくるから」

そう言つて彼女は座つていた椅子から立ち上がり、キッチンへと再び戻つた。

キッチンへと向かう道中は長い廊下であつた。別段長いわけでもないが、この教会では一番長い廊下を通ることになる。

「しつかし……今日もいい天気ねえ……」

そんなことを言いながら、レミリアは窓から空を眺めた。

その時だつた。

こちらに向かつてくる、人影が見えたのだ。

それを見て、レミリアは嫌な予感がした。

数瞬の時を置いて、玄関の門が大きくノックされた。

「まさか……!」

—— 神国教会の人間が、もうここまで来てしまつたのか。

そう思つて、レミリアはキッチンへ伸びる廊下を途中で引き返し、玄関へと向かつた。

玄関を開けると、そこにはひとりの大男が立っていた。彼の特徴を一言で示すならば筋骨隆々という単語がふさわしいだろう。そんな男が、二メートルはあるだろう門よりも高い男が、そこに立っていた。

「失礼。ここに教会があるのを見かけたものでな。教会ということは神国教会に属する教会で間違いないな？」

男はペンと紙を持っていた。恐らくそれで識別を行うのだろう。
とりあえず、レミリアはそれに頷くほかなかった。

それを見て、男はペンで何かを書き込んだ。ペンの動かし方からして、こここの住所を書き込んでいるようだった。

「中を調べさせてもらう」

そう言つて、レミリアに了解を取ることもなく、男は入っていった。

「ちよ、ちよっとダメです……!」

レミリアは慌てて男を止めようとする。

男は立ち止まり、踵を返し、レミリアの目を見つめる。

「……なぜだ。なぜ止めようとする？ 私はただ調査に来ただけだ」

「要件をおっしゃってください」

「調査だ」

「それよりも詳しく、お話願うことは？」

男は溜息を吐く。

「なぜだ」

男から発せられた一言は『疑問』の一言であった。

なぜ止められなくてはならないのか。自分は正義だ、とでも言わんばかりの強い視線をレミリアに注いでいる。

「……ともかく、唐突に来られても対応が出来ません」

「当たり前だ。抜き打ちなのだから。抜き打ちが唐突でなくて、何が抜き打ちだというのかね」

「それはそうですが……」

うまく反論する方法が見つからず、レミリアはこの時自分の頭の悪さに失望した。自分は今ここまで頭が悪いのかと絶望した。

彼女としては、少女をあの男に見つけられたら何が起きるかなんとなく予想がついていた。だからこそ、少女をあの男に見つけさせるわけにはいかないのだ。

だが、そのためには、どうすればいいのか。

答えは——ひとつしかなかった。

彼女は右腕の手首に装着していたリングに手をかけて、叫ぶ。

『ブロー・ブラスト』!!

刹那、彼女の周りに竜巻が巻き起こる。

それはとても強いものだ。周りにあったノートや椅子を巻き込んで、男の背中へと放った。

——だが。

「……『アイソレート』」

男はぼつりと、一言呟いた。

たったそれだけで、彼の背中に命中したはずの竜巻は消滅した。

踵を返し、一瞬の隙をレミリアに与えることなく、彼女の首を掴んだ。

その力はとても強いもので、油断していると気を失いかねないものだった。

「……俺がどういう役職なのか、どういう組織に所属しているのか、そしてあんたはどのような立ち位置にいるのか、それを解った上であの魔法を放ったんだよなあ？」

冷たい、声だった。

それを聞くだけで押し潰されそうになる——それほどの重圧を感じる。

男の言葉は続く。

「あんたは一端のシスター。こんな古い教会を任されたのは運が悪いかどうかしらないが……まあそんな感じだ。対して俺は『聖天使隊』の一番隊に所属する人間だ。その差はどれくらいか解るか？ あんたが下界で愚かな子供を助けている間に、おれはマホロバにいる……ってわけだ」

レミリアはもう、男の言葉を聞くことで意識を保つのに精一杯だった。

「神国教会の教典を、目が腐るほど読んだのであれば分かるはずだろう。マホロバに住む人間はカミサマに選ばれた存在だ。カミサマに選ばれた存在とはどういう意味か解るか？ 神の国へ行くことができる権利を有しているってことだ」

「そんなこと……彼女の辛さ……いいや！ ああいう子供や大人の屍の上に建っているだけに過ぎません……！」

レミリアは必死に、言葉を紡いだ。

それを聞いて男は笑う。

「ほう、それは自分で『ターゲット』を匿っていたという発言になるが、それでもいいか？」

「あなたたちのような野蛮な人間の暮らしのために、一生を終えることを考えれば、ここで生活させたほうがマシだと思いますがね」

「野蛮？」

男の眉がぴくりと動く。

「私のことを野蛮だというか？ 神の国に行くことができる権利を持つ、『聖天使隊』の私を侮辱するとも言うのか？」

「だとしたら、どうしますか？」

レミリアの言葉を聞かないうちに、男はレミリアの頬を強く叩いた。そして、その音が教会に響き渡る。

「おねえさん、どうしたの？」

「不意に少女の声が聞こえた。」

それが聞こえたレミリアは冷や汗をかいて、その声が聞こえる方向へと視線を写した。

——少女の姿を見つけるまで、そう時間はかからなかった。

「やはり隠していたのだな……この裏切り者め！」

そう言つて男はレミリアを投げ払い、少女——イヴァンのもとへ歩いていく。

その姿は彼女から見れば、どんなものに見えたのだろうか。

どんなものかは解らないが、どのようなイメージであったとしても、その男を『恐怖の象徴』として捉えたのは間違いないだろう。

彼女は後退る。しかしそれ以上に男のスピードが早い。

「逃げて……!」

床に衝突し、怪我を負ってしまったレミリアだったが、彼女を守るために精一杯声をかける。

残念ながら、彼女が使える守護魔法はそれほど強い威力を發揮しないし、遠隔操作もできない。一瞬で彼女の傍にいけば可能性は高まるだろうが、相手は強い。レベルも相当高いだろう。

そんな相手に対して、レミリアは出来ることなら逃げたかった。

でも、レミリアの目の前には助けを求める少女の姿があった。怯えている少女の姿があった。

彼女は気を逸らすために、魔法を放とうとした――が。

「おっと。そうだった、忘れていたよ」

そこで唐突に男が踵を返し、再びレミリアの方角へと歩き始める。

レミリアの目の前で男は立ち止まり、そっと右手を掲げる。

刹那、レミリアは呼吸ができなくなった。

「……の、ノーモーションで魔法が……！」

「聖天使隊はこういうこともできるのだよ。なにせ神のご加護が私にはついているのだから」

——神様。

そこでレミリアは考えた。神様はどうしてこんな汚れたものを『正義』などと決めて、

加護を与えたのだろうか、と。

この男が正義だとは、すくなくとも今の行動からは理解出来ない。だからレミリアはくやしかったのだ。

今まで自分が信じてきた神様は、これほどまでに汚れている存在だったのか、と。

「ああ、神様」

声に出さずに彼女は呟く。

——どうして、このような者に加護をお与えになったのですか？

レミリアは気が付けば、涙を流していた。

「今更命乞いをして無駄だ。この魔法は一度発動してしまえば術者に何かあるか術者が止めるという意志がない限りは続く。お前の身体が酸素を欲しがっていたとしても、息が出来ないというのは苦しいだろう？　だが、お前はそれほどまでの罪を犯した。神国教会への裏切りだ。苦しんで苦しんで苦しんで、今までのことを悔い改めて死ね。お前は神の国にも天国にも行くことはできないだろう。強いて言うならば待っているのは……地獄だ」

ほんとにそうなのだろうか。

レミリアは今まで正しいことをしてきたつもりだった。お祈りも、お掃除も、シスタ

―としてやらなくてはならないことは凡てやってきたつもりだった。もちろん、その行為凡てに神への感謝を込めて、だ。

なのに、他者の神の加護により、彼女は今絶命させられようとしていたのだ。

私は悪いことを、ほんとうに悪いことをしてしまったのだろうか。

彼女は考える。しかし、その意識も徐々に朦朧になってきていた――。

その時だった。

「……暑いな」

唐突に、男が暑さを感じ始めた。しかし、ここは比較的気候が安定している地域であ

るし、唐突に暑くなることもない。

男は背後を振り返る。

そこにあつたのは――巨大な炎の塊だった。

「な……!! どういうことだ……?!」

これほど巨大な炎の塊を、魔法で発現したのは男もレミリアも見たことはなかった。

そしてレミリアは直ぐに、少女が泣いているのを見つけた。

――まさか、彼女が？

そんなことを考えたが、それは彼女の容姿を見て、直ぐに否定された。

何故なら彼女の手首にバンドが装着されていないからだ。

この世界で魔法を使うには、素質以上に大事なものがある。それがそのリングだった。リングには『魔導鉱石』というものが組み込まれていた。魔導鉱石とは、ある鉱山でしか採掘することの出来ない鉱石で、それにはエネルギーが相当量含まれている。だが、必ずしも無限ではなく限りがある。そのため、替えの魔導鉱石が常に必要となるのだ。因みに魔導鉱石やそのリングは神国教会から支給される。この魔導鉱石によって、魔法を簡単に使うことが出来るようになった。神国教会がこの世界で高い評価を得ている一因でもある。

「は……はははっ！ 『上』からどうしてあれほど迄にしつこく捕縛を命じられたのが解った！ まさかリング無しで尚且つノーモーションに魔法を発動出来るとはな！」
男は笑った。それは自分の任務の真の意味を知ったからだろうか？ それとも自分にはこの魔法を何とか出来るといった傲りからだろうか？

レミリアはそのどちらでもない、もう一つの答えを導いていた。

恐怖。恐れているのだ、その火球を、少女を。リング無しで魔法を発動出来る、イレギュラーな彼女を、ただ恐れていた。

男は身体を震わせる。何処と無く汗もかいているようだった。

「見くびるなよ……。私は『聖天使隊』に所属し、神の加護を手に入れているのだぞ！！
リング無しで魔法を使ったからとはいっても所詮は子供！ 私に勝てるはずが——」

そこで、唐突に男の言葉が途切れた。

火球がさらに膨らんだためだ。床すれすれまで膨らんだそれによって、床にも火が燃え移っていた。

「なんつ……!!」

男が魔法を発動する暇も与えられなかった。何故なら男は巨大な火球に吸い込まれるように消えていったのだから。

レミリアはそれを見てただただ驚くばかりだった。

まさか、神国教会はこれを知っていたとでもいうのだろうか？

だが、今はもう消し炭になってしまっただろう男は、そんなことを知らない様子だった。

男を燃やし尽くした火球は、男を完全に焼き尽くしたのを確認したからか、自動的に姿を消した。

そして、少女はその場に倒れ込んだ。

「……!!」

レミリアは少女の元に急いで駆け寄り、まずは彼女の意識を確認した。結果として彼女には意識が残っていて、どうやら疲れが出てきたためか眠りについてしまったようだった。

レミリアは今あったことをもう一度思い起こしていた。神国教会からの刺客が、この

教会にやって来て戦闘を開始した。ただそれだけのことだ。

しかし、どう糸口を探しても、あの少女はあれほどの火球を放ったそれほどのエネルギーを持つているなんてことは見つからなかった。

「……それにしても、随分と凄いのね。ノーモーションであればほどの高出力魔法を使える少女、か」

レミリアは呟く。それは、彼女の過去と少女の姿を、重ね合わせているようにも思えた。

4

床に燃え移った火もたいしたことなく、直ぐに消えてしまった。イヴァンとレミリアはテーブルに向かい合ってジュースを飲んでいた。

「……あの炎」

イヴァンが呟く。

炎——とは、イヴァンが放った巨大な火球のことだろう。彼女がリング無しで、かつノーモーションで発現させた魔法は、あまりにも強力なものだった。

「……結論から言って、あなたをここに置いておくことはできないわ」
その言葉を聞いて、イヴァンは目を閉じる。

あれほどの魔法を放ったこと、さらに神国教会が追っていることを考えれば、もはや当然のことなのかもしれない。

しかし、まだレミリアの話は続く。

「とはいえ、あなたをひとりで世界に放り出してしまえば、今度こそ私は地獄に落ちるでしょうね」

立ち上がり、イヴアンの頭を撫でる。

「だから、私もついていきます。目的もあてもない旅になりますが、きっと神は私たちを救ってくれるでしょう」

「わたしと一緒に旅に出してくれる……ってこと？」

「ええ。このままでは私も、あなたも殺されます。真実を世の中に出さないままです。そんなわけには参りません。あなたは……いや、この世界のどこにも、不条理で死ぬような人間が居てはならないの」

「ふじょうり……？」

「要は自分はまだ頑張れるのに、殺される理由を押し付けられてそのまま殺されてしまうことよ。そんなのはうんざり。どうせなら自分が決めた場所で、自分で死にたいもの。そうでしょう？」

このシスターは随分と淡白な死生観を持っているようであるということ、彼女がもう少し大人になって頭が良くなれば理解できるのかもしれないが、生憎彼女にはそうい

うことが理解できそうにない。

「そうと決まれば、あなたの服を考えないといけないわね。白のローブがあるけれど、これは神国教会のロゴが入っているから直ぐに目立ってしまうでしょうね。となると……皮の鎧が確かあったはずね……いや、でも着られるかどうか、それを着て歩くことが出来るかどうか微妙ね」

レミリアは何かをぶつぶつと言い始めたが、イヴァンにはそれがなんだか聞き取れなかったし、例え聞き取れたとしても理解出来なかつただろう。

生まれてずっと奴隷と過ごしてきた彼女にとって、着替えることなど皆無だったからだ。

——心なしかシスターの目が輝いているように見えたのは無視することにしよう。イヴァンはそう思っただけだった。



結局イヴァンの格好は茶色の少し薄汚れたローブを羽織るのみとした。服は修道院だった頃に子供を預けていた時期があつたらしく、その時に余った服を転用することにした。

レミリアは心なしのゴールドと、薬草、それに聖水を持ってそれをカバンに入れた。

神に祈りを捧げ、レミリアは最後に確認をする。

そして、レミリアは思い出したように彼女に話しかけた。

「そうだ……自己紹介をしましょう」

「一回したんじゃないの？」

「改めて、よ。これからずっと私たちはパーテイなのだから。きちんとした自己紹介はしておきましょう。私はレミリア。回復魔法くらいは出来るから、よろしくね」

「……私はイヴァン。よろしく、レミリア」

そう言つて、ふたりは固い握手を交わした。

そしてふたりは、レミリアにとっては慣れ親しんだ教会を後にするのだつた――。

パラドックスよ、こんには。

「……まあ、そんなことは冗談として、だ」

「冗談だったのか。本当だったらここにある玄翁へげんのうゞでお前の頭を叩き割つてやろうとか考えていたよ」

そんなことを言いながら彼女は——紙パックのミルクティーを開け、一口飲む。

「それで、提案なんだけれど」

男は、小さく呟いた。

「ボクと共同研究しないか？ ……イヴ・エドワード」

そう言われて彼女——イヴは舌なめずりした。

イヴ・エドワード。

高名な科学者、ジョン・エドワードの娘で、彼女もまた類い希なる才能を持っていた。

ジョン・エドワード博士が亡くなったのは今から二年前——二〇三八年のことだ。その時彼女は十二歳で、しかももうエルダリア大学に通っていた。

彼女は父を尊敬していた。彼女は父のような存在になりたかった。

なのに、にもかかわらず——ジョン・エドワードは自らの命を絶った。

理由は——近年の歪められた評価だった。

彼が死ぬ前年、『パラドックスの恋文』理論が発表された。その時、彼女は被験者となり、理論の証明に尽力した。

結果は——成功とも言えず、しかし失敗とも言えなかった。

そもそも前提が間違っていたのだから。

二〇三六年に実施された実験では、そもそも定義が行えなかった。だからこそ、失敗してしまったのだ。

それにより、ジョン・エドワードの地位は没落した。

世間からペテン師と呼ばれ、学会での地位も失い——晩年は酒に溺れるようになった。そして、イヴはそれを見ていた。悲しそうな表情で見つめていると、ジョンはそれを見て、

「大丈夫だ」

とだけ言っていた。

その半年後——彼は息を引き取った。

だから彼女は——父親の汚名を返上したかった。

「……それで、何が目的なの？ 佐久間来喜（さくまらき）さくまらいき（さくまらいき）」

「おつ、僕の名前を覚えてくれたんだ。嬉しいねえ……」

「別に。白衣にネームプレートがついているだけよ」

ふい、とイヴは窓の方を向いた。空には飛行機雲が見えていた。



か。

来喜が帰ってからイヴは肩をたたいて、再びパソコンに向き合った。画面に映し出されているのはプログラムのコードである。

プログラムのコードの書き方は人それぞれだ。行われるオブジェクト毎に『コメント』を残す（コメントアウトする、ともいう）人もいるし、全くコメントを残さない人もいれば、自分だけ解ればよい——という感じでコメントをほぼ書いておかない人だっている。

イヴはどちらかという二三番目の人間に入る。コメントを余り書かないのだ。

彼女の研究は個人研究だから——である。

彼女の研究テーマは『電脳世界の構成と、現実の物理法則の適用について』だ。

電脳世界とは、名前のとおり、電気データ——01で表現できる世界だ。凡てが01で表現できる。

例えばの話をすれば、もしこの世界が電脳世界ならばリンゴの匂いや、味、見た目の凡てを紐解くと01で出来ているということだ。

では、現実の物理法則の適用とは——どういうことなのだろうか？

例えばの話をしよう。

電脳世界では、そのままだと通常の物理法則が適用されない。きちんとそのようにプログラムを作らなくては意味がないのだ。

だが、人間世界と電脳世界は大きく異なる。にもかかわらず、現実の物理法則が適用されるのだろうか？　それが、その意味だ。

彼女は今そのために——小さな世界を作っている。パソコンの中の、小さなサーバーを使って、小さな、小さな。

「この世界が無事完成すれば……私は、」

「その世界の創造主（カミサマ）になれる……って話かい？」

その言葉を聞いて、イヴは振り返る。そこに居たのは、来喜だった。

「まだお前居たのか」

「いや、忘れ物を取りにね。ところで、さっきのこと考えてくれた？」

「考えるものにもついさっきのことじゃないか。まだそんなこと……忘れていたに決まっ
っているだろう」

「嘘をつくなんて。クレタ人が自分は嘘つきだと言ってるようなもんじゃないか」

「……クレタ人？」

「おや、知らない？」

来喜は自分の部屋から持ってきたコーヒーカップを傾け、中に入っているコーヒー（と

思われる液体)を一口飲み、言った。

「嘘つきのパラドックスってやつだよ。クレタ人が『自分が嘘つきだ』と言うとするだろ？ でもそれはどちらかを信じててもパラドックスが生じてしまうのさ。それは……君のお父さんの論文にも書いてあったと思うがね」

そう言うと、イヴはパソコンの画面に視線を釘付けにしたまま、語気を強める。

「出て行け」

「でも、君は『嘘』をついていた。それは間違いないだろう？ 嘘をついたのなら、謝ってくれよ。別に今の嘘はそういうことしなくてもいい嘘だろ？ つく意味なんてないはずなのに……さ」

次号予告

- ・「神様アンソロ2」掲載予定、新作短編2号連続試し読み掲載！ 「スサノオの驚愕（前編）」
 - ・「Jodo」5周年プロジェクト進行中！第四部、「アスタリスク・クロニクル」第一話
 - ・「ロジカリスト」シリーズは誰も読んだことのない新作部分へ突入！「ロジカリスト（白）」
 - ・「ロジカリスト（猫）」二作同時連載再開！
 - ・新連載！『ハコニワ』から逃げられない少年少女——！「ハコニワ・リローデッド」
 - ・新連載！少年少女の不思議な夏休み。「僕と彼女のセカイ——新章・夏休み編」
 - ほか、「ぼくらはポッキー戦士 第一部完結編」、「ネクストワールド 名のなき世界3」、「黒板厨ゆうなマギカ：結」、「pokemon XY」、「終焉と黎明の物語 紅き終焉」、「インフイニティ新作『ヴンダー（E）』」、「奴隷少女の勇者道」、「パラドックスよ、こんにちは。」掲載予定！
- 8号、10月21日刊行予定。
- （当初「アスタリスク・クロニクル」は7号より連載開始予定でしたが、クオリティアップのため延期しました。）

